理木集

911.
7

我ら白地甲や形の山乃形　士朗

遠く来て明ら燒明く新年の春

弥ゝきて日見や色を古ふこてまく

新ら茂く去ら人形ら出きし只

也み字ゆを不白ゆ去ら人なりてや

弥語れ入山乃三号ゆ為ら市ら無く

左さうらこてら所ら市ら徒ら居た

のら白ものを宗とんうゆ市ゆめる

てなゝ白居老人ゝ少お徒てを

秋樹懷の文言は新形尾の社
縁らんしゝ所にまうい堤田の松間
堤未集乃序詞をもふ花の今云
つゝく松杷園乃文の一部ゝ比三寺
ゝもまゝ社しゝ美杷んゝ

甲子春　七十二翁　上

[illegible]

かゝゝ吹風を雲のたゝ元ゝ石　松陽
まゝむ茅の年ゝゝ十月吹　李兮
さえ色ゝ舟て杷織杷用ゝて　一止
はくゝひゝ石く出ゝゝ久幸　子允
くゝ木まて造ゝ君ゝ秋の月　梅園
すゝゝ石ゝれて歸ゝの眠ゝゝ　南路
言の上引人ゝも孔さむき　梅亭
ゝ住ゝけゝ雲ゝゝ杷　秋亜

神とあがめていつしか母の名を呼
吉風石壺を引き美うつきぬ
あをうつ籠波の峯も結ぶて
月神ことごとく一の中
方丈を過ぎて弓波結の
多勝ちくて教む高の口
与綴と結の上出鏡ちして
くないこ家へ伽藍のうち

止
元
固
四
水
項
字

ちつ芝くは、四てつ四ちひ
流上ケのそちくうくちを
うちうち鏡つもむて玉一玉衰
祇ちこ蓋のちて一ちちぬ
結ちこの和ちこをうち出当一
ちつちり四けちと鏡を角つ
八梅四ちを結一ち和ちを宝て
伽藍八神ちの鏡ひして来る

止
元
固
四
水
項
字

蓮のふつと何空やうの有るを
現ずるうちに、浄きい涼
竹の間々の雪も志ばく枝る哉　園
茅の葉赤をてすすり月　内侍
うつろなく鶯の舎もさやさや　文橋
老てい詩も宗の自の一二　坊
絶しうとのくかゝりてをるうよき　分
本口橋入て代くこと出す　止
　　　　　　　　　　　　　　元

梅の木の写ふ〻ら〻やく張ハ〻く
窓の何ぞうの風のかつつき　園
時雨ぞう蓋のさゝみ一度出り　橋
出ようう〻水す梅ふ蜂う　内
　　　　　　　　　　　　　　蓋

義経さま寺 家の上の加茂みの　一上
只さへ冬の夜さへ引寄　松陽
朝餉孫聞さま　何つらして　今
岩と花師子川ひきと寺　止
色芝のひやりとさ冷る春の月　今
寄鶴子水の深し桜林　仍
弱代寺人と色仏中なり　、
苔の古の屋根てもの憂き　止

もと裏のはてとろ小ろ人色八色
曙古の寺居を縁ふはと女
子面一の二階と堂の吹込て
写相鮮小て寺ろ花暗
小社と住連法て何号梅の上
鶯子一面こまと面頬
然本てなる子一人と又出遊び
歌とるを小こ屋ひ寺とさ

、仍　、止　、仍　、

泥鰌をはなしこ池く月と栄、
菜て刈り笑ふ山し　陽

桜ちる頃の桜なき門の春おろし　梅通
さゝ竹やくさる眼のうるはしき　公来
時ふるもやまくくと清水の石　蒼山
葉の表つて佛しき樹の粉香ふ　其池
山守や霧をわける家のうへをゆく　深苔
常夏まぁる宵をまつして時鳥　有芸
ある月やうちて居る枝のうゑる　暑左
こおれんとさ乎ハらくて荻の風　喜耶

引鴨もちらしかけも由きなし　杉濤

唐土の夏にことしも寄く眉の皺　為山

初茄子や手遠い風の吹通し　見外

萱の川音やきこむ月あはし　彩甫

花の風ちらしろ欲もなき人よふく　芳岑

その川よこさふれてみなと口　踏平

白魚やひらきし梅も一二里　丑休

このけ稲やをるまはうりのわさし竹　きく旌

新涼や梅くさきていまだところ　聖井

此花の跡てことある子の花　鶴良

尻立よ女の鵜や千鳥の秋　未湖

堂の精尼かかりて梅下月　北壷

そこ中ふく無てる行や見る　写哉

一足り寝る子と涼む河童かな　卓京

三日月やゆかしきなる松の古しめ　角よめ

峯そのを燈もてあさん秋の月　清民

[illegible]

一止

小[illegible]

采山

[illegible]

杉芽

さわらびきりの[illegible]の月

立江

稲[illegible]

白水

梅と[illegible]柳と[illegible]て[illegible]

葉塚

歯固の[illegible]

江三

[illegible]

天周

永きり[illegible]

太年

[illegible]の上り[illegible]

久人

山[illegible]

一茶

[illegible]

巨涛

[illegible]

西心

[illegible]

丑乙

菊は元獨り矣ミなり菊の花　大麟

病後

六ヶ敷ひて始しきを敷の雜毒ゝ　十二童　浩く

小鮒うけの旅おりしろ一老の空　写蓼

ゝとゝ大きうしろ小さき鮒ゝ　玉角

拾ひ寄を命ゝの有ろ石　桂林

鮒の味を富ゝりのして茶の夫　玉光

吹ゝすてゝとかゝくゝ福寿草　玉矣

霧雨の明るの近きほゝの流　林風

鮒ゝゝろゝ砂の鮒ゝ蘆の蓋　風月

憐ゝさあてゝゝ手ぬゝ明るの上　彫景

東雲茶の上川藻の蓋　湖蓋

四ゝ雨ゝ水ゝしゝゝほゝ寸　玉水　桂月

何ひゝあゝ老ゝ人ゝゝ山ゝゝ　ケセン　古。山

鮒さい蓋ゝのゝ小春千鳥　尚玉

白牡丹　蓼の[illegible]

[illegible]　山蓼

[illegible]　汐耕（ナカル）

山信の[illegible]　奥山（サヂヤミ）

月[illegible]　北山（マヘサハ）

地を[illegible]　舎利（カンナリ）

芋[illegible]　伐蓼（アリカヘ）

燃[illegible]　月交

[illegible]　玉笑

まつけとさ[illegible]　霧川

名月や[illegible]　雪一

伸[illegible]　友露

[illegible]　京遊

[illegible]　文雅

[illegible]　律雄

[illegible]　松葉

大[illegible]　伯場

[illegible]　活中
[illegible]　双瑠
[illegible]　荷屋
[illegible]　二肩
[illegible]　左砂
[illegible]　風止
[illegible]　芳塢
[illegible]　[illegible]

[illegible]　舟オカ　止月
[illegible]　一[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　入[illegible]　松[illegible]
[illegible]　ハルシ　梅[illegible]
[illegible]　[illegible]
[illegible]　一[illegible]

月の夜鳥啼く山梅のちりてきぬ　恵雅

咲あけてあとへて花を咲せけり　一二菊

日のさす野寺まで匂ふ小桃かな　観喜

宵ゝ月や菜は畑の松の雨　松暁

すゞしさも戻りて来る新潮の上　梅乙

松風に吹付られて麻の乱り　梅扇

よし原の宿にかゝる稲妻かな　其石

木下の飛あり見へ寄しる今の月　素気

苔清水稲妻に深く見えにけり　如風

木の葉を踏していちる稲妻かな　素枝

吹尽す風のやまれの稲妻かな　千楽

来かゝりてたゆたふ雨の稲妻かな　三甫

川となく橋との根高き稲妻哉　三陽

稲妻掃く砂の面かしき波も知　喜一

今まさに付る鳥の稲妻の形　素也

刈跡す小草に秋の月残りける　淋洲

うきなからさかり咲や吾子の前　洛
枯るほと月梅風情のさくさく　笠三て　清之加
行枝はふりしひらりと梅の花　如泉
梅か香よたりと覗くや笹数の奥　ことゆめ
雪に伏す篠起しけり鶯　大坂白　玉林
嫋けるほと星は明るし世の春　玉笑
明ゆれは千代の宿るり初しく守　月川
春色の芽題よるり映え秋の杖　ワカマ　寄三

梅ゝのこゑは去年の色と匂ひ多く　ハヤマサ　峻吉
初若は来て春の付し新宗や　ノメ　梅川
宿の梅くらへの所まて匂ひけり　松菖
七種の声や春まつ水し出舎人　桂松　葉吾
汲かの雨水と白めや梅の花　孫兵
一筋にまつかや房結ひ藪し見　松路
宿の来て梅銀やか香と見とる香　梅年
時節の外しも業つや丘の梅　松雪

E50
3.14

雪の加とくにふる事一枝の内　徳典

ゆくかはるの高ひくく秋ぞ深ぬる　松史

鮒付の西して高る小滝清　名トリ茶之

茶菓の勝と浩高松の名ユリ上　宇典

雲ときいけるとうすよりの小松高　車四

一山高ろ〻〻高ろやまもの内　車嶽

彩色や高む高宝高ろ高る高　吾用

蘭の月ひく福寿高　清高

月この帝の居て生ろやまろ水　一河

多ろむ多付新ろも萩のかろ高　秀房

はろ〻かろ高ろ四ろ〻一物の高　学多

はる多戦ろ密拂ろ浩の玉の玉　九月三重　徳平

山張高て高ろ〻高一萩拂ろ　松年

琴ろ〻て東六ろて高ろ高　久松

白金の中日の入山ろこの高ろ山　柳水

[illegible]　亀お

福寿[illegible]　会三

[illegible]　李兮

[illegible]　梅園

[illegible]　子元

[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　柳志

[illegible]　泉淡

[illegible]　松陽

存